＜用語＞

* 開放耕地制度(the open field system): 個々の農家の所有する耕地を〈開放された状態open〉に保つことによって、村落共同体による耕作規制の徹底を図った制度。
* 荘園領主(The Lord of the Manor): 荘園という領地の中で法的・経済的な権力を握る地主。
* テューダー朝(Tudor): イングランド王国(1485-1603)と、アイルランド王国(1541-1603)の王朝。薔薇戦争後に誕生。有名な人物はエリザベス一世。
* 荒蕪地(waste land): 雑草が生い茂った土地。荒蕪⇔肥沃
* ジェントリ(landed gentlemen): 一五・一六世紀以来のイギリスで大地主のこと。元来はジェントルマンの集合名詞。貴族とヨーマン（中産農民）の中間に位置し、議会や地方行政を担った。郷紳。
* 輪作(rotating crops): 同じ土地に別の性質のいくつかの種類の農作物を何年かに1回のサイクルで作っていく方法。
* 問屋制家内工業(domestic industries): 中世的手工業から近代的工業への移行期の初期資本主義において、最もよくみられた小商品生産の形態。問屋制度は、一般的には原材料を前貸しし、生産物を買い占めるのが普通。
* 農業革命(Agrarian Revolution): 資本主義の成立期に産業革命とならんで行われた農業技術や経営方法の急激な変革。封建的土地所有から資本主義的土地所有への移行を完了させた

(担当:来海)

* 1. INTRODUCTION: 開放耕地制度とは何か

1. 18世紀初頭

耕作地の半分が開放耕地制度。イングランド中部地方(East Anglia: 今のNorfolk地方, central southern England: 南イングランド中央部)で広く採用されていた。

1. ～1700年
2. 村の土地=1.common land(共有地)、2.waste land(荒蕪地)、3.wood land(森林地)
3. 開放農地はそれぞれ1エーカー位の地条に区分されていた。←畝や草でできた小径が境界
4. ※各農家に、地味の良い土地も、悪い土地も分配されていた。
5. 開放耕地制度下の農村における社会構造

* 荘園領主や大地主が主な土地所有者だったが、時に彼らはその地に住んでおらず、不在地主として土地を貸出していた。
* 自分で耕した土地を所有する人は土地に対する自由保有権を持っていた。
* 借地農は、証紙か、または地主の裁量によって借りていた。
* 小百姓とは、小さい土地を所有または借りていた人のことを指すが、彼らの生活は完全に牧草地に依存していた。
* 小屋住み農は共有地に小屋を持ち、家畜を育てるために共有地や荒蕪地を使っていた。

1. 開放耕地制度: 農民の協力が不可欠

・全ての農民が同時に同じ作物の栽培を行わなければ、制度が効率的に機能しなかった。農具も村の中で分配された。

←開放耕地制度では、輪作がなされた。(レジュメp22の図)

* 1. 開放耕地制度の欠点

1. いくつかの欠点

* 畝や休耕地が存在→土地が無駄になっていた。
* 農具を地条から地条へ移動させるのに労力がかかった。
* 新しい作物を栽培する余地がなかった←会合によって個人の意見が尊重されないため
* 囲い込みされてない牧草地において、家畜の養殖をコントロールすることは不可能であった。家畜は痩せこけており、繁殖は効率的に行われなかった。
* 根菜類は育てられなかった。→冬に家畜の餌がほとんどなかった。クリスマスの頃には家畜は殺され、塩漬けにされた。
* 有能な農民ほど苦しむ。←隣のぞんざいな農民の土地から雑草の種が侵入してくるから
* 土地の生産能力を使い切ることが難しかった。

1. 開放耕地制度は主に、自給自足の農業形態。→大量生産に不向き
   1. 農業革命とは
2. 1750-1850 年に農業で起こった変化を表す言葉。この変化は二つの部分に分けられる。
3. 開放耕地を囲い込むこと
4. 新しい農業技術や農具、手法を採用すること

1. 注意: 農業「革命」とはいっても、その変化はどちらかといえば漸進的で、かつ変化の度合いも地域ごとによって異なっていた。
   1. 1750-1850の間に農業革命が起こった理由
2. 人口増加→農産物の需要が増加。
3. 人口増加によって工業都市が拡大→食料供給拡大が必要。

加えて、国内市場が拡大→農業に革新と変化をもたらして稼ごうと考える人が増加。

1. 商業的な農業(⇔自給自足農業)は農業社会から推奨され、更には産業家でさえもリターンを期待して農業に投資していた。
2. 1750年以降、農産物価格は徐々に上昇。フランス戦争の間にはとうもろこしの輸入減と同時に不作が相次いだ。→農家がお金を国庫から借りて、新たな農業技術に投資する引き金となった
3. 有料道路、運河、鉄道によって、農家は作物を街へ運ぶことができた。農家が道路や運河の設置に投資したこともあった。これらの要因が互いに働くことで農業革命が起こった。

(担当：西浦)

2.5 囲い込み運動

(a)囲い込み(Enclosure)

・小さな開放地をつなげて大きく

・より自由に耕作できるようになる

・主に行われた地域は，Midland, East Anglia, central southern England

※第一次囲い込み運動と第二次囲い込み運動

(b)どのようにして囲い込みされたのか

(1)～1740年頃

土地の所有者たちの私的な合意によって，所有地がまとめられた

(2)1750年以降

国会法によって，囲い込まれた

※国会法は有効な要素が数多くあった。

・それぞれの囲い込みは法的に文書化され，正当性が証明される

・反対をなくすために，反対する人に機会を与える

・村全体で一度に囲い込みが出来る

→1750年～1850年に4000の国会法によって土地が囲い込まれた

(c)なぜ1760～1780年と1793～1815年には議会によって囲い込みが広く行われたのか

(1)1760～1780年

人口増加→シリアルの高騰→生産量の増加＋利益の獲得

約900の国会法が可決

(2)1793～1815年(フランス戦争)

不作＆輸入困難→シリアルの高騰→生産量の増加＋利益の獲得

約2000の国会法が可決

(d)どのようにして囲い込み法は採決されたのか

～流れ～

①教区(地区)において、全体の3/4から4/5の土地の所有者たちが、囲い込みの決断をする。村の残りに対して囲い込みをしたいという請願書を作る

②1774年から、その請願書は8月下旬から9月上旬のうちに、三週連続で日曜日に教会の扉に貼り付けられる。わざわざ地元の新聞に請願書を掲載する地主もいる

③下院で草稿が作られ、二回チェックする

④議会委員会で草稿が入念に読まれ、反対意見や欠点が考慮される。そして修正されたり、草稿のなかの言葉が見直されたりされる

⑤下院で三度目のチェックがなされ、上院に通される

⑥最後に国王の勅許がなされて、国会法となる

(ほとんどの請願書は滞りなく手続きを終えて，国会法となる)

(e)一般囲い込み法(General Enclosure Act)

一般囲い込み法とは，囲い込みされた土地の管理運営を簡略化するもの

(1)第一次一般囲い込み法

1801年に可決

特に共用地の囲い込みの手続きのモデルとなる

(2)第二次一般囲い込み法

1836年に可決

囲い込み委員(次項参照)を任命する権利や，議会へ直接申し出ずに囲い込みできる権利を，地元の農家に与えた

(3)第三次一般囲い込み法

1845年に可決

様々な村を回り，囲い込みを監督する，「スペシャリスト」の委員会が設立される

(f)議会囲い込み委員(Parliamentary Enclosure Commissioners)の役割と仕事

(1)囲い込みを実行するため，3～12人の囲い込み委員を任命する

(2)その後，委員により調査員と事務官が任命される

調査員…

囲い込みの計画→土地の記録→委員による会合

(3)地主に新たに土地を配分して，新しい地図を作成

(4)普通，委員は不正をしたり，大地主や貴族を贔屓したりしていたと考えられていた

例）J.L.やB.Hammond

しかし，最近の調査では、彼らは複雑な仕事をとても上手にこなし、小百姓の主張もしっかりと考慮していたという傾向にある

(g)村を議会法で囲い込みする時にかかるコスト

コストは教区の大きさや、囲い込みが教区全体なのかそれとも共有地と荒蕪地だけなのかによって左右されたので、教区によって異なっていた。土地を与えられた農家は与えられた分に応じてお金を払わなければならなかった。1エーカーあたり1.4ユーロ(ha辺り3.4ユーロ)というのが見積もりである。だが上述のように教区によってそのお金は異なっており、Warwickshireでは1エーカーあたり2.5ユーロから5ユーロと開きがあった。これは小さい農家にとっては重荷で、このお金を払えない人もいた。

(担当:入江)

(h)囲い込みの経済的影響

* 開放高地が徐々に消えていった。
* 耕作地が拡大し、収穫量が増加。
* 新しい農法の導入を促した
* 家畜と農作物がお互いに良い影響を与えあった。つまり、より多くの飼料となる作物が育てられ、冬でも家畜が生き残れるようになり、また家畜は多くの肥料を生み出した。
* 囲い込みされた土地を使うことにより、科学的な繁殖が行え、家畜の質が上がった。

1. 囲い込みの社会的影響
2. 進歩的な大地主ほど囲い込みから恩恵を被った。そして戦争期間中は莫大な利益をあげ、囲い込みされた土地の大地主として国内での地位を上昇させた。
3. 囲い込みは小農家を消滅させたのか？

従来の考えでは、小規模地主や小作人は囲い込み費用を払う余裕がなく、それゆえ土地を売るか工業地域に移らざるを得なかったと主張されていた。

しかし、最近の主張によると1760～1815年の間、つまり囲い込みが最も盛んに行われていた時期では、むしろ小農家の数は増えていたとみられている。この理由としては、農作物の値段高騰や人口の増加による食糧需要の拡大がある。

1815年以降、物価の下落する一方で地代は戦争時のまま据え置かれたため、小規模農家の数が減少し始め、驚くべきスピードで貧困層が増えた。

1. 小作人や不法占有者への影響

従来の主張によると囲い込みの結果、彼らはそれまで使っていた土地の権利を失い、ひどい苦労や貧困を味わったとされてきた。

だがその一方で権利が認められて、いくらかの土地を配分されるものや、囲い込み担当の委員が彼らの苦悩に気づき、法的な主張がなくとも、小さな土地を与えられる者もいた。

(j)囲い込みによって「農村の過疎化」が進んだというのは本当か？

囲い込みにより、土地を失くした労働者が田舎から拡大中の工業地域へと移る動きが拡大したと言われていたが、これに矛盾する証拠があり、それが次の３点。

* 当初、囲い込みはより多くの労働力を必要としたため、土地を失った者が雇われた。

例えばフェンス作り・道路や新しい倉庫の建設など

* 同様に、土地の拡大によって農作業を行う労働力が必要とされた。
* さらに、収穫量の増加により、醸造や製粉といった関連産業が発展した。
* より多くの牧畜業者、酪農家、牧羊者が必要とされた。

以上より、囲い込みが田舎の人口減少を引き起こしたというのは疑わしい。統計によると、19世紀後半になって初めて広範囲にわたる田舎からの移住が起こったとわかる。

(k)1790～1830年の間に田舎では貧困に苦しんでいたが、その原因が囲い込みでないとした

らいったい何が原因なのか？

1. 南・東イングランドでは、問屋制家内工業の衰退が貧困増加の一因だった。それまで機織りや帽子作りなどで収入を補っていた。
2. 1790年代の不作と穀物高は、農家に利益をもたらしたが、労働者には苦痛となった。
3. 囲い込みが16世紀にもう行われてしまった地域の労働者は、さきほど挙げたフェンス・道路作りなどの職がなかったために、貧困に陥った。
4. 田舎の貧困は、囲い込み以前も当たり前にあった。

2.6 18世紀の技術進歩と農業の先駆者

(a)「農業革命」の2つ目のポイントは、新たな技術・手法の導入。

ノーフォークといった交通網が比較的優れ、土壌が適した所で主に発展。

(b)新たな作物の栽培

18世紀になると、根菜類（パースニップ・カブ・サトウダイコンなど）や牧草（ルーサン・サンフォイン・クローバーなど）が一般的になる。

これらの作物のおかげで家畜の質・量ともに向上。

そして、家畜がその作物を食べ、同時に肥やしによって土壌を育てるといったように、互いに良い影響を与えた。

また、クローバーが価値のある、新しい作物となった。価値のあるとは、マメ科植物（エンドウ・ソラマメ・クローバーなど）に含まれる根粒菌または根粒バクテリアが空気中の窒素を固定し、アミノ酸や亜硝酸を植物に供給するから。

(担当：吉野)

(c)土壌改良

(d)18世紀にタウンゼント子爵が行った農業への貢献

「ノーフォーク農法」：四輪作農法

→休閑地がなくなる／お互いに補完する働きがある

→一年を通して土地を無駄なく使える

結論：タウンゼント子爵は新しい方法の利用価値を認識していた

（※カブを導入したのは別の者であるということを認識しておくこと）

(e)18世紀に家畜飼育において行われた革新／ロバート・ベイクウェルの貢献

・家畜の質向上のための飼料向上が注目されるようになる

* ベイクウェルは飼育法の先駆者としての信用があり、新種の羊（ニューレスター）を生んだ
* 自身の土地に徹底的であるので有名であった
* ベイクウェルの同期：ジョン・エルマン／チャールズ、ロバート・コリン／ジョージ・カリー

結論：ベイクウェルの重要性とは他の人が基礎とする農業の展望を作った

ことにある

(f)18世紀におけるジェトロ・タルの農業変化への貢献

seed-drill（種ドリル）の発明

→19世紀に他の者の手によって改良された形で普及

結論：タルは、後の発明家が改良できるような考えを発案した点において

重要である

（g）他の新しい機械

・ロザラム鋤（Rotherham plough）

・Robert Ransomeによる鋳鉄製の鋤の刃

・Andrew Meikleによる脱穀機

・Patrick Bellによる刈り取り機

2.7 プロパガンダが農業革命にした貢献(担当:来海)

プロパガンダ: ジェントリやジャーナリストといった個人の集まり。新しい農法の普及に努めた。

1. トーマス・コーク（1754-1842 年）
2. 元々荒廃していた土地を囲い込み、泥灰土を使い、輪作を行い、選択交配といった新たな方法で耕作した。
3. 1778-1821年:自分の土地で毎年農業会議を開き、優れた農業手法を紹介した。
4. 土地の年間賃貸料を2200ポンドから20000ポンド(約9倍)に上げたと言われている。
5. アーサー・ヤング（1741-1820）
6. 1763-1766年: 農業するものの、あまり成功をおさめなかった。
7. →各地を旅しながら農業について書くことに専念。彼の記事を読むことで歴史家はその当時のイングランドにおける農業の実態を思い描くことができた。彼は新しい農法や、囲い込みといったことを強く支持した。
8. 彼の出版物: ’A Six Weeks Tour through the Southern Countries(南部諸州 6 週間の旅)’’, ’The Farmer’s Calendar (農事歴)’
9. 1784-1804年’The Annals of Agriculture(農業年誌)’ という雑誌の編集者
10. 1793年: 新設の農務省の大臣に任命される。←フランスとの戦争中、農家が優れた農業技術を身につけるのを奨励するため
11. ※彼は新しい手法の宣伝に尽力したが、結果として批評の方が目立った。
12. ウィリアム・マーシャル（1754-1818）
13. ヤングと同じく農業に関する著書を出していた。
14. 彼の主な著作: ’A General Survey of the Rural Economy of England(イングランド農村経済の概略)’

初版はノーフォーク農法について書かれており、1787年に出版された。

1. 農業委員会設立を提言。だが自身は官僚仕事よりも、調査結果を出版することを優先した。
2. 彼の著作はYoungより客観的ゆえに、より信頼できる。
3. King George 3(ジョージ三世)

熱心な農業家の王様。ヤングと知り合いでAnnals of Agricultureに寄稿したこともある。王はウィンザー朝の王領地で新しい農法を実践した。→新しい農法を王公認のものとした

2.8 CONCLUSION

農業革命がどれくらい「革命的」だったのか?

「革命」: 急激な、暴力的な変化といったものを示唆

⇔実際の農業革命: 新しい作物、輪作、選抜育種、新しい機械が全体的にゆっくりと取り入れられていった

「暴力的」=議会による囲い込み(特に1793年から1815年の間。これによって耕作地が増え、前衛的な農家が利益を最大化するために新しい技術に投資することを可能にした。)

結論: 農業「革命」といえど、急進的で革新的だとは言い難かった。